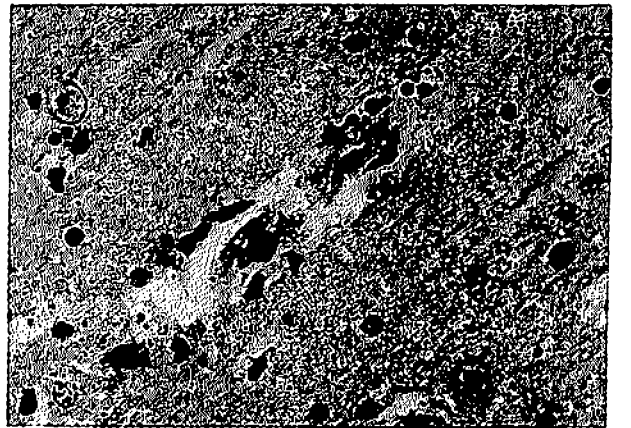
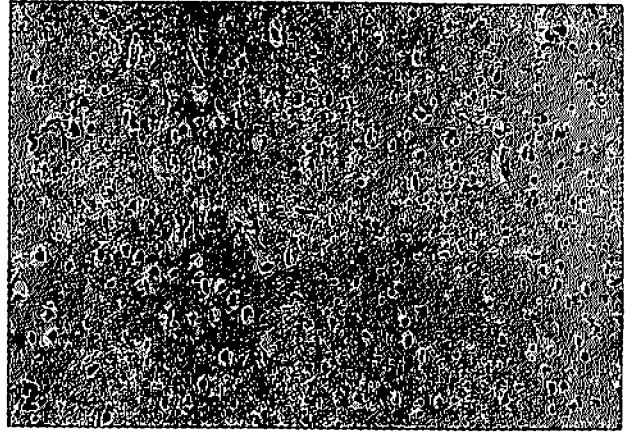
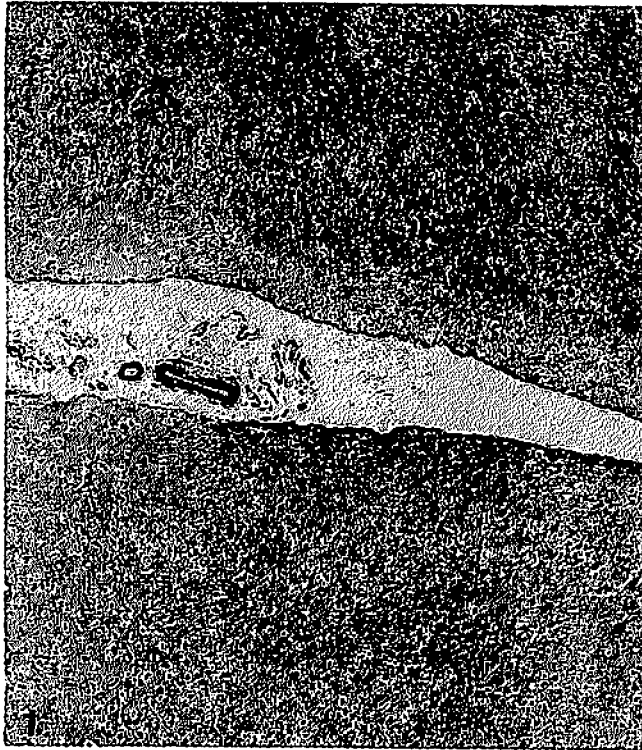


# ヒツジの前脳

家畜衛生試験場北陸支場出題 第22回獣医病理学研修会標本No.375



**動物：**ヒツジ，サホーク種，雌，3才。

**臨床的事項：**56年5月20日，体温39℃，食欲減退，歩様踳踉。22日，体温41℃，転倒・痙攣し，眼球振顫を示した。23日，体温42℃，食欲廃絶。四肢を激しく動かし，後弓反張，眼球振顫を示した後，12時30分に死亡。

**剖検所見：**1. カタール性小腸炎(肛門周囲に血便附着)。2. 全身性循環障害—諸臓器・組織の充血と点状出血多発，体腔液の増量，肺水腫および右心室の拡張。3. 肝および腎の実質混濁。4. 胆嚢の膨満。

なお，十二指腸より *Cl. perfringens* A型菌の有毒株が分離された。

**組織学的所見：**両側の外側溝周囲および左頭頂葉部の大脳皮質に仮層状の不全壊死が認められた。その部の神経細胞は均質性一乏血性変化や液化に至るさまざまな程度の重篤性変化を示し，神経細胞の萎縮のため病巣部は疎性化していた(写真2，HE，×100)。ニッスル染色標本の低倍率の観察では，神経細胞内のニッスル物質の消失により，神経細胞は輪廓不鮮明で，健常部(上部)にくらべて病巣部(下部)は褪色してみえた(写真1，ニ

ッスル染色，×40)。そのほか，神経細胞の変性は軽度ながら両側の前脳および中脳灰白質にも広く散在性に認められた。脳の血管は充・出血が目立ち，小動脈壁や血管周囲に水腫や硝子様滴状物(写真3，HE，×400)の存在が散見された。脳以外の部では，カタール性小腸炎，肝，腎，心およびリンパ組織の実質変性，赤脾髄の好塩基性単核細胞の増数がみられた。

**組織学的診断：**大脳皮質の不全壊死(褪色変化)。

大脳皮質不全壊死に関連する変化として脳の循環障害が重視された。羊では，チアミン欠乏による大脳皮質壊死のほか，*Cl. perfringens* D型菌による腸毒血症の際に対称性脳軟化のみられることが知られている。今回の例では，病理学的に腸毒血症を疑う所見がみられたものの，*Cl. perfringens* D型菌は分離されず，分離された *Cl. perfringens* A型菌にも菌数の増加はみられなかった。したがって，今回腸毒血症の原因については明らかでない。また，腸毒血症の発症以前にチアミン欠乏が存在したか否かについても不明である。